

消せない火が被害増幅、悪夢の1週間

暗い朝の始まり

「消防車は何しとるんや！」。

「水が出ないぞ！」。

この日、地震発生の未明から、いつもなら人々が寝静まる深夜まで、被災地の至るところで消えることがなかった二つの叫び声だ。地震発生後から休む間もなく次々と燃え広がる炎を前にして、人々はなすすべもなく、ただ立ち尽くすことしかできなかった。

神戸大学室崎研究室によると、地震直後の1時間で、少なくとも神戸市内では55件の火災が発生している。地震発生からおおよそ4時間後の午前10時頃、神戸市上空500mの高さを飛んでいた報道各社のヘリコプターの中は、街から立ちのぼる炎と煙でむせかえるようだった。黒煙は神戸の街の空を覆い、夜明けの訪れない暗い朝と共に長い一日が始まった。

折からの巻き上げるような強風が災いして、炎の舌は方向をあちこちに変える。火はまたたく間に広がり、この日、市内だけでも出火は100件近くに上った。美しい街並みを誇った神戸は、たった数時間でまるで戦災にあったような焦土と化した。

水が出ない!

まさに“泣きっ面に蜂”。地震による直接的被害を情け容赦なく増幅するのが火事であるが、今回はさら

に“消防活動ができない”という最悪の事態となった。

まず、出火件数22件と神戸市内でもダントツに被害が大きかった長田区を例にとると、地震発生後1時間以上たった午前7時頃から消防署員97人、消防車11台の動員をかけた。だが、火災が同時多発で発生し、しかも、倒壊家屋やガレキが道路に散乱して消防車の行く手を阻んだ。

混乱で渋滞する道路をなんとか通り抜けてせっかく消防車がたどり着いたケースでも、断水で消火栓の水が出ず、防火水槽の水はわずか30分で尽きた。強風で火勢が増す。

「水さえあれば……」。オレンジ色のガラス細工のように崩れ落ちる家屋を見ながら、水の出ないホースを握りしめた消防士がきつく唇をかみしめた。

海からの取水も大混乱

午前7時30分、長田消防署では、こうした断水の連絡を受けて、急きょ海からの取水を決断した。長田港に消防艇をつけ、海水をホースで区内各所に送る作戦だ。

が、これも難航した。まず、海から約2km近くホースを連結する必要があったが、そのためには少なくとも5台の消防車をつながねばならなかった。しかし、余分な消防車はもはや手元には一台たりとも残っていない。大阪から10台の応援部

隊が午後1時30分に到着したが、幹線道路の交通渋滞のため、その後がなかなか続かない。ようやく応援部隊が到着すると、とりあえず海の方に向かうように指示するが、海までのわずかな道がひどい渋滞、肝心の消防士が交通整理をするありさまだった。

夕方になってようやく必要な台数がそろったが、今度はせっかく伸びた取水ホースの上を渋滞した一般車を通り、命の綱のホースが破れてしまった。そのため、各消防車の水圧が一定せず、先端で水が出なくなった。

その水圧調整のため、各消防車間で連絡を取ろうとするが、無線の周波数が全国共通でひとつしか使えないため、混線して用をなさない。最後には水圧の調整のため、消防士が2kmの道を走って行ったり来たりするという最悪のパターンになってしまった。

また、同じく最も被害が大きかった区のひとつである東灘区では、比較的早い段階で十数台の消防車が駆けつけたものの、防火水槽は空っぽ。あわてて海水を利用しようとパイプを伸ばしたが海に届かず、民家の古井戸を探して使うという情けないありさまを露呈した。

このように、今回の地震では消火活動で重要な初期消火がほとんどできなかったことが被害を大きくした。

神戸市では、発生から3時間後に災害対策本部を設置すると同時に、消防車120台の出台体制を整えた

ものの、肝心の消防士が交通の混乱等で消防署までたどり着く事ができず、約半分しか出動できなかった。

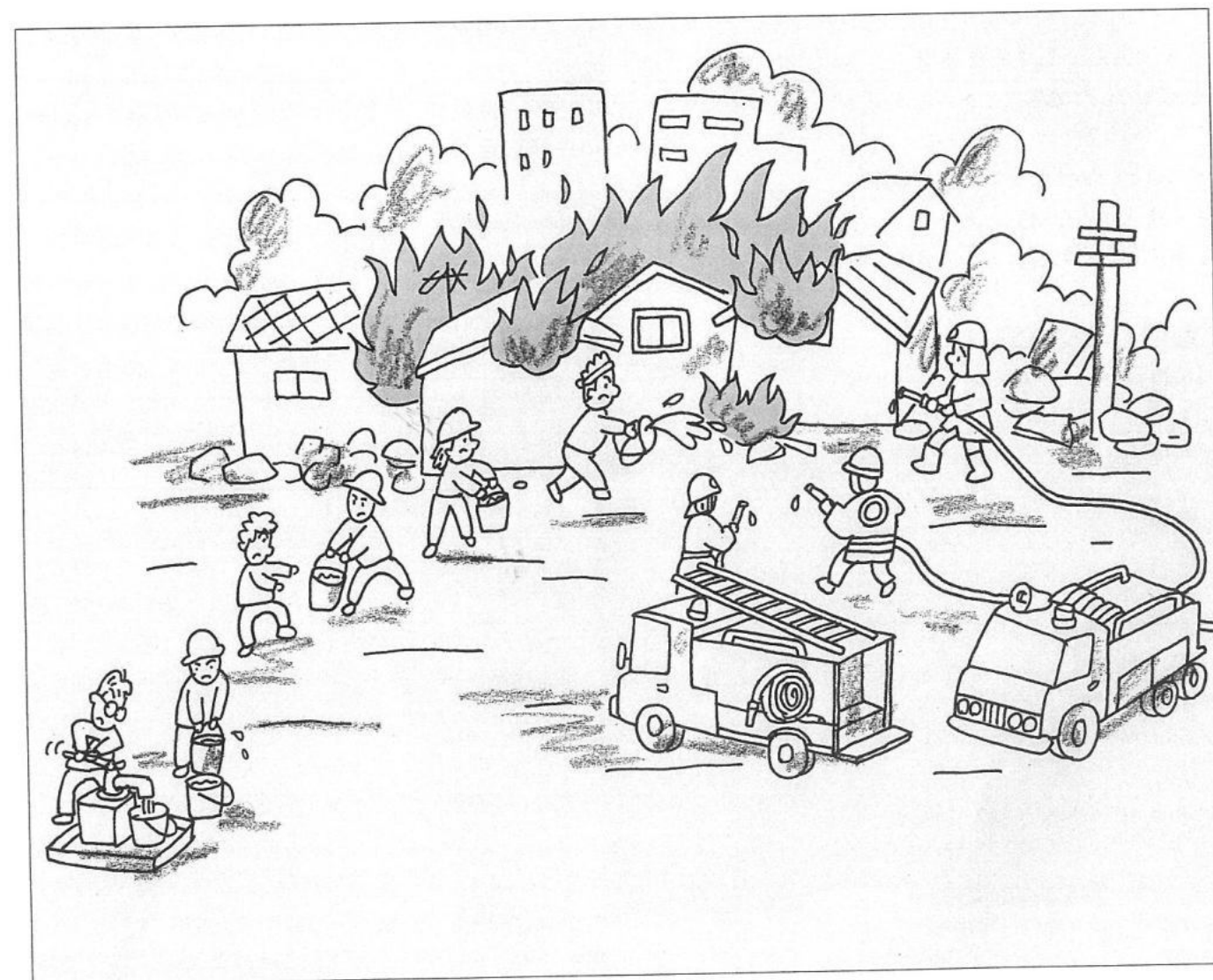
こうした状況のなか、市消防局では自力での消火活動は困難と判断し、大阪など周辺の自治体に応援を頼む。ところが、交通渋滞に阻まれ、応援部隊が到着し、なんとか消火態勢ができたのは午後4時頃。最終的に他府県からの応援がすべて到着し、

消防車100台、署員500人という“消火対応できる態勢”が整ったのは、火災発生から18時間あまり経過し、暦も変わった18日の午前0時過ぎだった。同日10時には、19自治体から救助隊や消火隊計253隊、1180人、ヘリコプター8機が投入されたが、時既に遅し。長田区では4072棟が焼失、多くの人命が失われた後だった。

数日後、突然あがる火の手

「子供がまだ、中に!土砂の下にいますっ!」。

夜空の下で燃え上がる炎を避けながら、倒壊した家屋の下に生き埋めになった人々の必死の救出作業が続いていた。風向きが突然変わり、それまでガレキの中でくすぶっていたらしい残り火が急にパアッと燃え上



消防活動

がる。あわてて「避難して下さい！早くっ！命の保証はできませんっ！」。声をからして叫ぶ消防士にも火の粉が注ぐ。生き埋めになった子供の名前を狂ったように叫び続ける母親が無理やり現場から連れ去られる。

もう終わったと思った災害は、まだまだ終結してはいなかった。

今回の地震による災害の特徴のひとつは、地震発生数日後になっても起き続ける火災の多さだった。

その原因のひとつが、地震発生から1日半たった18日昼頃、ようやく復旧した電気だったのは皮肉なこと。電気復旧直後には、切れた電線や壊れた電気機器類からの漏電による出火が相次いだ。また、いったん鎮火した火災現場からの再燃も多

発した。

同日午後8時頃、東灘区本山中町2丁目の空き住宅2階から出火。近隣の住宅に燃え広がり、計8棟、約1200㎡に全焼の被害が出た。

「わしら何もしてへんのに、何で火が出るんや……」。電気が復旧したため、ようやく避難所から一度自宅に戻って持ち出す荷物を整理していた人々が、寒空に呆然と立ち尽くす。この近くでは地震発生直後に大規模な火災が発生したが、同日夕方までに鎮火したと見られていた。が、ガレキの下でくすぶっていた火種が飛び火し、約5mの西風に乗って一気に燃え広がったらしい。この日、市内では同様の“焼けぼっくに火”型の火災が14件起きている。

翌19日にも7件の火災が発生したが、原因はやはり飛び火や避難民によるたき火などとみられている。

地震発生から6日たった23日になっても、長田区梅ヶ香町1丁目の住宅地で民家や倉庫11棟、およそ500㎡が焼ける火災が発生。消防関係者の話によると、漏電のほか、消火活動が不十分なものがあり、火種がくすぶったままになっていたこと、ガス漏れへの引火、たき火の不始末などが主な原因と考えられる。こうした地震発生後数日たってからの火災は、過去の地震では例が見られなかったことだという。

神戸市内11カ所の消防署の消防士1329人にとって、悪夢の日々だった。



渋滞に巻き込まれた消防車（写真中央）

●家屋焼失(兵庫県)

